令和５年度　青梅市立第四小学校　学校評価シート

＜学校経営方針の重点＞ １. 豊かな人間性と社会性の育成　　２. 確かな学力の定着
３. 特別支援教育の充実　　４. 開かれ、信頼される学校

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄 評価	学校関係者評価記入欄 コメント
豊かな人間性と社会性の育成	基本的な生活習慣の確立と規律ある生活を実現する。	ていねいなあいさつ・掃除の励行と相手を思いやる気持ちの育成	「全力あいさつ」を目標に、年間を通して気持ちのよい挨拶ができるようにする。校内だけでなく家庭や地域でも、一人一人が場に応じた挨拶が、すすんでできるように、教職員が手本となって指導する。	B	ここ数年学校全体で組織的に取り組んできたはずだが、すすんで挨拶ができたと答えた児童は82%にとどまり、昨年度より9%下がった。保護者の評価もわずかに下がっており、児童会の取組のみでは改善することは難しい。	今後も年間目標として「全力あいさつ」に取り組む。児童会を中心とした具体的な取組を考えることに加え、教職員が率先して挨拶に取り組む姿勢を示していく。また、学校だけではなく家庭や地域でも児童が自ら挨拶できるように、保護者や地域の皆様とも力を合わせて指導に取り組んでいく。	A	校内での挨拶は、学年を問わず交わしてくれる。しかし、校外ですれちがった際は、以前より挨拶をしてくれることが減少した。改善策にあるように、学校・家庭・地域で共通の取組ができる目標・スローガン等が必要だと思う。
			「全力そうじ」を目標に、清掃活動に取り組ませる。自己の役割を意識しながら校内美化を通して物を大切にする心や、協力して主体的に働く心を育てる。	B	縦割り班清掃を継続して実施し、高学年をリーダーとした「全力そうじ」に取り組んできたが、掃除を一生懸命していると答えた児童は、昨年度より6%低い92%だった。高学年児童がリーダーシップを発揮し、児童の意識向上につながる具体的な取組が、縦割り班活動に導入できなかったことが原因だと考える。	高学年のリーダーを中心に掃除への具体的な取組を考え、異年齢集団の中で校内美化への意識をさらに育てる。その上で、児童同士の関わりや教え合いに任せるのではなく、児童の意識向上の取組を計画するなど、引き続き教員も清掃指導に力を入れていく。	B	役員等でよく学校に伺うが、汚れが気になったことはない。子供たちの教室も、ゴミが落ちているのをあまり見たことがない。四小の「全力そうじ」をより一層充実させるためには、改善点にあるように、教師が意図的に「児童の意識向上の取組計画」の具体案策は大切だと期待している。
			異年齢集団の活動を通して、男女仲良く協力し助け合うことで、児童の自主性や責任感・思いやりを養う。	A	94%の保護者が縦割り班での活動の効果を肯定的に評価している。児童の意識とは差が見られるが、高学年児童を中心とした縦割り班活動を年間を通して実施し、異年齢集団で男女仲良く助け合い成長する姿を保護者に評価していただけたことが分かる。	高学年児童の主体性を引き出しながら、新たな生活様式の中での新たな異年齢集団の活動を工夫し、実施していく。また、縦割り班活動に限らず、各学年の実態に応じた異年齢集団の活動を各教科等でも積極的に取り入れていく。	A	四小の高学年は下級生の面倒見が良い。毎年感じることで引き続き活動していってほしい。異年齢児童活動では、助けてもらった体験、助けた体験を通して、人とのつながりを感じる貴重な体験だと思う。主体的な活動を積極的に取り入れていくことは、今後も大切だと思う。
確かな学力の定着	基礎学力の定着と、問題解決型の学習を推進する。	学習規律の徹底と、きめ細やかな指導の実施	聞く、話す、考える基本を重視した真剣な学習態度を育成する。学力向上へ向け学習意欲を高め、児童の学習意欲を高め、「力が付く授業」「学びたくなる授業」づくりを行い、基本的な学習内容の習熟を図る。	B	「学力向上を図るための調査」(4～6年)の結果、学習が「分かる」「得意」「楽しい」等ほとんどの項目で、都平均を上回る肯定的な回答だった。児童の学習意欲はさらに高まっている。一方で、「全国学力・学習状況調査」(6年)の結果、国語科の「書くこと」には引き続き課題が見られた。	国語科の「読むこと」「書くこと」の学力の定着を図るため、校内研究やＯＪＴを中心に、教員の指導力向上と授業改善に努める。また、図書館司書や図書ボランティア等とも連携し、読書教育の充実に取り組んでいく。	A	学習の基本を学ぶ上で、聞く、話す、考えることは、必須。先生方の教材製作、指導等子供たちが興味をもって取り組める工夫が大変だと思うが、大切だと感じた。校長日記の中の先生方の授業の学習意欲向上のためのご尽力に、心打たれました。
			毎日1時間以上、一人一台端末や電子黒板、ICT機器を有効活用し、学習指導を充実させる。	A	昨年度に引き続きＩＣＴ機器の有効活用も着実に進めてきた結果、「1人1台のタブレットの有効活用」について肯定的な回答をした保護者は90%で、ＩＣＴ機器の活用を学習指導の充実につなげることができた。国語科の研究を推進しているが、今後も、ＩＣＴ機器の有効活用を着実に進めていく必要がある。	１人１台のタブレットをはじめＩＣＴ機器の活用については、これまでの研究と日常的な実践を基盤にして、デジタルとアナログ、対面とオンラインを効果的に組み合わせた学習指導に取り組んでいく。	A	一人一台のタブレットは時代の流れなのでしょうが、その利便性と表裏一体の危険性についても、しっかり学習の機会をもってほしいと思う。学習環境の変化に子供たちより大人が苦慮されているように感じる。ＩＣＴ化の学習のデメリットを補いながら、今後も学習指導の充実をお願いしたいと思う。
			学年に応じた家庭学習の内容を示し、「学年×10分の家庭学習」の習慣化を図る。また、家庭の協力を得て年2回の「メディアコントロールチャレンジ」を実施し、規則正しい生活習慣を定着させる。	B	左記の取組を通して基本的な生活習慣や家庭学習の啓発を行うことができた。しかし、習慣が身に付いていると回答した保護者は69%で年々低下している。また、「学力向上を図るための調査」(4～6年)の結果、昨年度同様、家庭学習の時間は、都平均を大きく下回る状況だった。家庭による意識の差、学級や学年による家庭学習の取組の差があることが課題である。	「メディアコントロールチャレンジ」「家庭学習のすすめ」などの啓発活動を年間を通して行い、取組の意義を保護者に理解してもらう。生活習慣や家庭学習の定着に向け、校内研究等を通して、家庭学習の内容や時間、取り組ませ方を組織的に検討するなど、家庭学習の充実に取り組んでいく。	B	家庭学習は、家庭の協力を得ることが大きく影響していると感じる。本人の意思もあるが、家庭環境は様々で、学習と結び付いていることも多く、取組も難しいと感じる。家庭学習の大切さを家庭・児童・学校で共有したい。
特別支援教育の充実	児童の個性を理解し合い自己実現を図る。	個性や発達段階に即した指導と、交流学習の充実	つくし学級及び特別支援教室ひまわりと通常学級の児童間・教師間の交流や連携を通して、仲間意識や障害を含む他者理解を深め、偏見をなくし、温かい人間関係を育てる。	A	今年度も、学校行事以外での充実した交流が各学年で実施できている。障害に関する理解を深める機会をもつ中で、偏見や差別のない温かな人間関係が育っている。保護者からの意見にも応えることができた手ごたえはあり、保護者からの肯定的な評価も78%とやや向上した。取組の状況が保護者に伝わっていないことが引き続きの課題である。	引き続き、つくし学級と通常学級の交流を計画的に進め、障害に関する理解を深め偏見や差別のない人間関係を育める交流が図れるよう推進していく。学年によって差が生まれないよう、年間指導計画等にも盛り込んでいく。また、交流の様子を学年便り学校ホームページ等で保護者に伝えていく。	A	低学年の頃から、つくし学級との交流を行うことで、差別のない人間関係をつくる方向で進めていくことを望んでいる。つくし学級の保護者からの要望等も取り入れ、実行していけるといいと思う。校長日記により交流学習の様子が具体的によく分かった。ありがたい。
			校内委員会、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラーや外部機関と積極的に連携し、児童の特性に応じた指導や支援ができるようにする。	A	担任・特別支援教育コーディネーター・スクールカウンセラーとの連携ができている。担任からも保護者や外部機関等へ積極的に働きかけをすることで、理解を得ることができ、就学支援も充実している。不登校児童の支援も含め、担任に負担がかかり過ぎない組織的な対応も進められている。	引き続き、校内委員会を中心に、課題をかかえる児童についての就学相談を組織的に行う。スクールカウンセラー、外部機関とも連携しながら、担任が保護者との教育相談・就学相談を効果的に行える体制を充実させる。不登校支援についても、組織的な対応を強化していく。	A	その子供の特性に応じた指導を受けられる環境がとても素晴らしいと思う。気軽にスクールカウンセラー等外部機関に相談できる体制や連携も大きな効果を生んでいると思う。担任に負担がかかり過ぎないようにするために、校内委員会の機能をより活かしてはどうか。
開かれ、信頼される学校	保護者・地域等と連携し、教育環境を充実・整備する。	開かれた、安全・安心な学校づくり	学校公開および学校評価の実施、学校便りなどの各種便り、ホームページやメール配信等、学校情報のきめ細かい発信を行い、保護者や地域との連携を深める。	A	学校からの情報発信が効果的であったとする保護者が99%だった。新たなメール配信システムも定着して有効活用できているが、何よりも学校ホームページの校長日記による情報発信が評価につながったと考えられる。人数制限等をなくし、学校公開等で児童の様子を観ていただく機会も増やすことができた。	今後も、ホームページの内容の充実や学校メールのより効果的な活用を模索し、学校の情報をより適時に効果的に発信できるよう、今後も努めていく。また、学校公開や保護者会等の持ち方を工夫しながら充実させていく。	A	ホームページやスクリル等で情報を公開し、保護者に細かい情報提供をしていると感じる。校長日記がおもしろい。保護者・校外の人はもちろんだが、子供たちにも見てもらいたい。また、校長先生の学校便りでは、簡潔で明快な方向性を示されたことも、保護者の理解につながっていると思われる。
			地域人材の活用や地域の自然・文化・施設に働きかけ、青梅学を推進する。関係機関と連携し、安全な環境を整え、安全教育の充実を図る。	A	地域の皆様や関係諸機関と連携した特別授業をこれまで以上に多く実施することができた。これまでの取組に加えて、青梅市シルバーマイスター２名による特別授業を合計４回実施するなど、全学年で、青梅学を充実させることもできた。	引き続き、保護者や地域と連携し、地域人材や地域の魅力を活用した青梅学の推進を図っていく。青梅学年間指導計画による系統性と持続性をもった学習活動を推進するとともに、保護者や地域の皆様による教育ボランティア等も幅広く呼び掛けていく。	A	地域の特性を生かした学習ができる環境を提供できることは、素晴らしいと思う。また、地域の発見を進めることで、青梅市の魅力を伝える機会になる。継続的な活動を望む。校長日記は、学校が多様な地域人材の活用や地域の自然・文化施設に働きかけていることを保護者・地域に伝えていただいたすばらしいもの。